

伝え

＝ 特集 ＝

日本口承文芸学会 第20回 記念大会報告

当学会は創立20周年を迎え、去る6月1日～2日に國學院大学
たまプラーザキャンパスにて、記念大会を開催しました。
「伝え」19号では、この20回大会の報告と感想を特集します。

公開講演

徳江元正「口承文芸のとなりの説話—中世の註釈」
大林太良「人類文化史における口承文芸」

報告／中川 裕

徳江氏は「古今和歌集」「伊勢物語」「万葉集」の註釈という書承の世界には中世・室町の説話が反映されているとして、それを豊富な例を通じて極めて具体的な形で提示された。これらの註釈は漢字・カタカナという共通した文体で書かれ、その漢字遣いにも独特のものがある。そして同じ話が同じ文体であちこちに出てきており、その意味で「古今」「伊勢」「万葉」が註釈の世界で重なりあう。すなわち、和歌の註釈という世界に独自の書承の伝統が築かれていたということがわかる。そこではまた「日本記伝」という言い方が非常に多く見られ、「日本記伝」—「天皇の名」—「主人公の名」という構成をとるものが多い。主人公も普通の説話には登場してこない人物が現われるという特徴を持つ。こうした共通特徴の背景には歌説話の存在が想定される。これを説話と呼ぶのは、「昔—」という言い方で語られること、天皇名や主人公名を挙げることで時代を定めていること、故事因縁を説いていることが理由である。このように、現在にはそのままの形では伝えられていない歌説話を、註釈・書承の世界から拾い上げることができるということが、「口承文芸のとなり」という表題の由縁である。

大林氏の講演は、人類の歴史において口承文芸がどのように誕生し、発展し、終焉を迎えたかという、20周年記念にふさわしいスケールの大きなテーマであった。まず、口承文芸は人類の歴史においてどこまで遡るかという、通常回答不可能と考えられるような命題に対し、「言語がなければ口承文芸は成立しない—言語の起源が口承文芸の起源」ということで、後期旧石器文化以降であると明言されるところから始まった。そして、社会的な階層ができることによってイーミックな範疇としての口承文芸のジャンルができる。すなわち、昔話・伝説というようなジャンルが形をとってくる。支配階層の出現とともに神をたたえる歌が登場し、階層の発展と宇宙というものに対する関心が歩調を合わせる。その証拠として、世界の起源に関心を持つのは世界的な文明地域やその周辺に限られることが挙げられるとされた。

次に新大陸と旧大陸のコントラストについて述べられた。新大陸にもさまざまな発展の段階差が見られるにもかかわらず、新大陸と旧大陸の間には大きな断層がある。たとえば新大陸には「ことわざ」も「なぞ」も叙事詩もない。動物昔話は世界に広がっているが、動物寓話は旧大陸にしかない。すなわち旧大陸の中でのイノベーションは新大陸までには広がらなかった。一方、旧大陸の中にも東西の地域差がある。海幸・山幸の失われた釣針を求める話や、墓の中で生れた子供の話は太平洋沿岸にしかない。反対に、魔法の食卓や開けゴマの話は西側にしかない。また、旧大陸の奇妙な現象として、スカンジナビアからモンゴルにかけては頭韻が発達し、東南アジアからオセアニアにかけては脚韻が発達しているという現象がある。

最後に、大林氏は「20周年記念」というめでたい席で申し訳ないがと断わりつつ、口承文芸の時代は終わったと説く。それはこれまで各ジャンルを担っていた階層が消滅し、また文字を皆が使うようになって、口承という手段がかつてのような力を持ちえなくなったからだということによるという。これは口承文芸研究の根幹に関わる問題だと思うが、会場にいた参加者の方々はどのような感想をお持ちになったのだろうか？（千葉県）

研究発表

研究発表は第一会場、第二会場に別れ、合計八つの発表がありました。このうち、インド関連の発表とそれ以外の発表にわけ、難波美和子、田中浩子、小堀光夫の三氏に報告、感想をお願いします。

★ インド関連の研究発表を中心に 難波 美和子

今大会の研究発表では、インドに関わる発表が三件あったが、それぞれ題材も観点も異なる発表であり、インドの口承文芸に関心のある者としては、多様な話題が提出されたことが興味深かった。三つの発表に対する私の感想を簡単に述べてみることにする。

田森正和 / 『ラーマーヤナ』から見た『桃太郎』— “読みの可能性” —

▼田森氏は、「桃太郎」と『ラーマーヤナ』の間に見られる構造の共通性とモチーフの相関を示し、「桃太郎」に成立の過程で“語られない部分”を想定することで比較した。この方法を面白く思った。語らないということは、話型の成立とどう関わっているのだろうか。『ラーマーヤナ』の伝播と昔話への影響の問題については、発表者が述べた通り、考証不可能な部分が多い。立証が不可能だとしても、東南・東アジア地域の類話研究によって生成や変容過程、更に影響関係の推定に成果が見られるのではないだろうか。

アニタ・カンナ / 今昔物語集の天竺部を巡って

▼連続する地域一帯での比較研究の必要性は、カンナ氏の発表において言及されなかった成立過程の問題について考える場合にも、重要であろう。カンナ氏は『今昔物語』の伝と『ブッダ・チャリタ』のようなインドの伝ととの比較から見出せる違いが、仏典からの引用の際の日本的な解釈や、作者の構想による物語化の可能性を指摘した。しかし、中国等の仏教文学からの影響関係も無視できない。このような問題を取り上げる際には、日本とインドの個別の比較研究だけでなく、東南アジアや東アジアの口承・文献資料との検討が不可欠であることを改めて感じた。

マンジュシェリー・チョウハン / インド文芸における非人格的存在

▼チョウハン氏の発表は、以前に私が関心を持っていた問題と重なることもあり、参考になった。「非人格的存在」とは、今回の発表の中では異類婚姻譚における神霊や動物を指すと考えられるが、彼らと人間との関係の在り方を、発表者は自然と人間との調和を反映したものであり、自然と共存の教えを目的として語られたものと解釈している。話型の相違や地域の違いによっても同様な結論となるだろうか。今回の発表の資料には信頼性に疑問のあるものが挙げられているが、もっと多くの話数で詳細な分析を提示してもらいたいと思う。（茨城県）

★ インド関連以外の研究発表を中心に 田中 浩子

今大会におけるインド関連以外の研究発表は、五つ行われた。

菱川 晶子 / 人獣交渉史—狼と塩—

▼狼と人間との関係を「狼が塩を好む」伝承を含む話や言い伝えなどの分析を通して考察した。会場から「送り狼」の話が、経験談、事実譚として語られた実例が挙げられたが、事実か話かは定めがたいという意見もあり、このあたりの議論も興味深かった。

根岸 英之 / 民俗誌における口承文芸の記述方法

▼従来の民俗調査の資料化では、「文芸性のある完形・独立した話を話者のモノローグとして記録」されるに止まりがちであった。しかし、根岸氏は、資料テープから翻字する際の取捨選択の基準を変えることと、話者とさまざまなメディアとの関わりという視点からの解説を加えることで、文芸面からだけでなく、口承面からの研究にも対応できる資料化の試みを、自身の参加した調査の資料を使って示した。昔話の調査に参加して、テープ起こしの段階で、どこまで記録化しておくか悩んだ経験のある者には、新しい可能性を含む試みとしてとても興味深かった。

栗田 有康 / 韓国の妖怪・トケビ—その特異性と韓国人の心—

▼韓国の昔話によく登場するトケビに関して、その特色と特異性についていろいろな面から論じた。トケビの姿は、一本脚の巨人、美女、鬼火等々で群れていることもある。性格は、相撲好き、歌、踊り好き、性的興味が大きい、無知で愚かかと思えば、利口で賢いこともあり、悪戯好きでもある。陰気な所を好み、古い生活用品や女性の血のついた物になるといわれたり、埋もれた金銀の化身ともいわれる。そして、人間に禍福をもたらす。

トケビは純韓国産の心の産物であり、恐ろしいこと、不可思議なこと、非現実的だが、鬼神（信仰の対象）とするにはバカげたことを表す霊的な存在ではないかという発表だった。会場からは、トケビの持つ棒と男根崇拜との関わり、トケビのトリックスターとしての要素、中国の山神との類似性についてなどの発言があった。

遠藤 庄治 / 沖縄のキジムナー

▼昔話・伝説・世間話という分類では捉えきれない「沖縄の妖怪として知られているキジムナー」の伝承を、膨大なコンピューター化された資料の一部を基に紹介した。伝承の中のキジムナーは、呼称も話型も多様で、山仕事も海仕事もし、禍福ともに人間にもたらすという。多くは子供のような姿をしており、変身し、財宝や不思議な力を持っている。住み処も韓国のトケビに近い。火とも関わりがあるようだ。このようなことから、こびと（トケビ、コロボックル、ケンムン、カッパなど）との関係が興味深いとの発表だった。

(東京都)

★ 磯沼氏の発表を聞いて 小堀 光夫

磯沼 重治 / 菅江真澄遊覧記に見る口承文芸資料—口承文芸研究の先駆け—

▼磯沼重治氏の発表は、真澄の旅日記が果たして口承文芸資料となりえるのか、また彼の旅とその説話記録の態度が口承文芸研究の先駆けといえるのかを我々が考えていく上での問題提起であった。磯沼氏は『醜田濃刈寝』等、真澄の初期の作品群から説話記事（義経や小町等）をとりあげ、江戸の天明期に聞き書きとしてこれらを記述した真澄の口承文芸に対する関心の先見性に注目している。

しかし、あくまでも真澄の旅日記は文芸作品であり、真澄の旅も採訪ではなかった点など口承資料としての限界性にも考慮をしなければならないだろう。

(埼玉県)

特別企画

昔話伝承者による語り

白幡ミヨシ (岩手県遠野市)
蒲原タツエ (佐賀県藤津郡)

20周年を祝って、特別企画として伝承の語り手お二人を招き、昔話を語ってもらいました。

報告 / 杉浦 邦子

遠野の語り手、白幡ミヨシさん（明治43年生）と、肥前の語り手、蒲原タツエさん（大

正5年生)は、対照的な語りの容態を見せて下さった。

白幡さんは白髪を髷に結び、着物とお揃いの前掛けをして、「サトムの婆さま」「シノダマ一つと針千本」「福の神と貧乏神」「瓜こ姫こ」を語られた。低い静かな声が会場にひたひたと広がると、見事なリズムを持った語りは聞き手を魅了し尽くした。発語の「昔あったずもな」を除いて伝聞を表す語が「…たって」と語られていた。日常生活のレベルで昔話を語り伝える際、参考にしたい言葉遣いだと思う。これは蒲原さんにも通じる。

その蒲原さんは洋装で明るく元気に登壇し、よく通る豊かな声で、「観音谷の申し子」「鰻の蒲焼」「蟻の年は十歳」「鼠のてんぷら」を語られた。縁あって出会った人びとに語るのが嬉しくてたまらないという蒲原さんの喜びが聞き手に伝わって、笑い声が絶えない。これまでに記録された話数764話という。幼時に聞いた昔話が丸ごと身体に入っているので、五十音をいうのと同じように出てくるのだそうだ。

会場の明かりを落とし過ぎて、語り手からは聞き手の顔が見えなかったと思う。お互いの顔を見て、相槌を打ちながら聞きたかった。(東京都)

シンポジウムについては、企画者、参加者、それぞれの立場から報告や感想を述べてもらいました。企画者の立場から、代表して石井正己氏に、参加者の立場から、武田正・剣持弘子・常光徹の三氏にお願いました。

シンポジウム

柳田國男・関敬吾とそれ以後一口承文芸研究の流れ

基調報告 石井正己「柳田國男の昔話テキスト」
小澤俊夫「関敬吾の仕事から受けつぐもの、受けつがなかったもの」
斎藤君子「北方との関連から見た日本の昔話」
飯島吉晴「現代伝説研究の課題」

司 会 福田 晃／三原 幸久

★ シンポジウムを終えて

Ⅰ 企画者の立場から 石井 正己

理事会において、学会創立20周年の大会のシンポジウムのテーマが「柳田國男・関敬吾とそれ以後一口承文芸研究の流れ」に決まりました。それを受けて、まず「柳田國男」と「関敬吾」が残した研究を読み直し、さらに、近年、活発な研究が行われている「外国昔話(外国民話)」と「現代伝説(都市伝説、現代民話、世間話)」の領域について、現在の問題を浮き彫りにしたいと考えました。そして、事前の打ち合わせを司会者を交えて行い、若干の調整をして臨みました。

最初に、石井が「柳田國男の昔話テキスト」で、柳田が、原資料をリライトして作り上げた『日本昔話集上』に始まる三分類と『昔話採集手帖』に始まる二分類が平行関係にあることをとらえ、今後、一口承文芸の文献学的研究が重要になるだろうことを説きました。次に、小澤俊夫が「関敬吾の仕事から受けつぐもの、受けつがなかったもの」で、話型カタログのみを使った関の方法の限界を越える緻密な比較研究の必要性を説くとともに、関は興味を示さなかったが、文芸の内部の研究や作家の手を経た再話を重視すべきではないか、と論じました。そして、斎藤君子が「北方との関連から見た日本の昔話」で、昔話の比較研究が南方重視の傾向にあるのに対して、「雁取爺」「大年の火」「猿蟹合戦」などを取り上げ、儀礼や観念の一致あるいは複数の伝播ルートを考えるべきことを指摘しました。最後に、飯島吉晴が「現代伝説研究の課題」で、「世間」の変質に伴って、「現代伝説」「都市伝説」と称する必要が生じ、モダン・フォークロアの問題と密接に連動しながら

ら研究が進んでいることを明らかにして締めくくりました。

これらの基調報告に対して、それぞれにコメントがありましたが、時間の関係で「参加者相互の議論」を深めることができませんでした。ですから、当日参加された方々がどう受け留めたかがより大きな問題になるのではないかと思います。私個人は、シンポジウムを終えて、日本における口承文芸とその研究もまた、大きな〈変革期〉に来ていることを思わずにはいられませんでした。それゆえに、私たちが今、内外に向けて何をすることが一世紀後の人々から問われると思うのですが、どうでしょうか。なお、シンポジウムの内容は、機関誌20号に掲載される予定です（以上、敬称略）。（東京都）

★ シンポジウムを聞いて一参加者の立場から 武田・剣持・常光

㊦ まだ、見えてこない一口承文芸研究の方向— 武田 正

シンポジウムの報告を聞きながら、「まだ見えてこない」と呟いていた。石井正己は柳田が昔話は個々の話型やモチーフとともに、昔話の全体像をつかむために、三分類か二分類とすべきかに戸惑い、その中から二分類へ行きつくことになる点を、細かく見ていく必要性を取り上げて、大変示唆的であった。柳田の中に「昔話の全体像」追求の意図があったことを指摘している点である。小澤俊夫は関敬吾から受けついだものとして、話型・モチーフの比較や相似の細かい日本国内の資料による研究が、最近では日本周辺の諸国にまでひろがりを見せるようになったことを指摘しながら、関から受けつがなかったものとして文芸としての昔話を取り上げたのは、小澤の年来の主張でもあるが、それは「語り」をもって伝承・伝播されてきた昔話の語り手と聞き手の関係そのものというよいだろう。従来の研究が等閑視してきたものを、小澤は文芸としての昔話研究というが、むしろ私には柳田の考えていた「昔話世界の全体像」と言い換え、その民俗学的研究の重要性と読み取り、その方向性を聞きたい欲求にかられたが、まだ見えてこないと呟いた次第である。

帰路時間の都合で中座したが、斎藤・飯島のレジメだけを見ると、細かい比較の斎藤報告や、新しい分野も含めての口承文芸研究の必要性を示唆した飯島報告も大変示唆的で、特に飯島報告に興味を持った。それが、従来の研究とどう結びつくかが、もう一つつながらないうらみがあり、「生活譚（世間話）」研究に戸惑いがあるという印象を受けており機関誌次号のシンポジウムの掲載に期待しているところである。（山形県）

㊦ 斎藤君子「北方との関連から見た日本の昔話」を聞いて 剣持 弘子

今まであまり知られていなかった北方の話に、予想以上に日本の昔話と近い話があること、そしてそれらの話の背後にヨーロッパの影響も透けて見えることがわかり、刺激的な報告でした。果たして日本に固有といえる昔話はどれくらいあるのでしょうか。現地での調査、資料の入手、翻訳がさらに進めば、これまでの研究成果を修正する必要も生じてくることでしょう。昨今、伝統的な昔話の研究は時代遅れであるかのように見る傾向もあるようですが、じつは、日本の昔話についての研究が深化するのはこれからなのだという感懐を強く持ちました。（神奈川県）

㊦ 飯島吉晴「現代伝説研究の可能性」を聞いて 常光 徹

はじめに、共同体（ムラ）のハナシの世界が、近代という人・もの・情報の急激な流動化のなかでどのように変質していったのかについて説かれた。世間話を現代伝説とか都市伝説と呼ぶようになるのは、ムラ社会に軸を据えてとらえてきた「世間」の変質と深く関わっているという。つぎに、「口承文芸の一ジャンルとしての世間話」と「自由な談話の技術としての世間話」という二つの見方を示され、それぞれの研究の可能性を具体的に述べられた。世間話（現代伝説）研究の動向と問題点がわかりやすく整理されていて興味深かった。（埼玉県）

第32回研究例会のお知らせ

日本口承文芸学会秋の研究例会を下記の通り開催いたします。

日時：平成8年10月19日（土）

午後2時～5時

場所：中央大学駿河台記念館

TEL.03-3293-3111

発表者

酒井正子氏

「葬歌と鳥歌の生成

—奄美徳之島の事例から—」

松村賢一氏

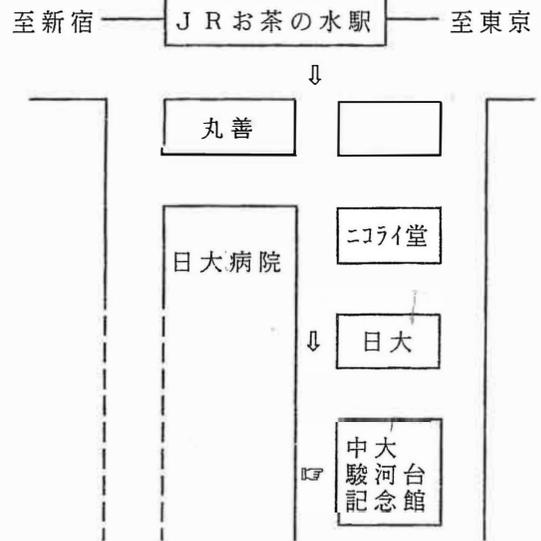
「アイルランドにおける語りの伝統

—ケルトの古歌『ブランの航海』

をめぐって—」

* 今回は、酒井氏、松村氏をお迎えして徳之島とアイルランドの歌謡について発表していただきます。

中央大学駿河台記念館案内図
(JRお茶の水駅下車/徒歩5分)



事務局報告

〒150 渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室（野村教授）内

日本口承文芸学会事務局 ☎03-5466-0224

送金先：[郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan

口承文芸に関心のある方を広くご紹介下さい

☆編集担当は、大島誌・中巻・中村と子です。